

地産地消に取り組む

# 大工・工務店

有限会社岩木建設

○「いわ木の家」物語

株式会社大山建工

○大工を育てる——新人4人

○M様邸

○「勉強会」——前田伸治氏講話

有限会社キーポイントホーム

○佐藤様邸

○田中規雄様邸

○ドッグカフェ

企業組合県木住

○古川様邸

○アーバタウン石江——県木住「木の家」展示場

○O様邸

株式会社ミヨシプラス

○漆戸琢矢様邸 兼 展示場



# 『いわ木の家』物語

屋根の上で風にひるがえる五色旗と、矢車。新築現場でこれから「上棟式」が始まる目印だ。建築を司る神様に感謝し、工事の安全と無事完成を祈願する儀式が上棟式。(有)岩木建設では、初代から受け継ぐ上棟式をどの現場でも行っている。祭壇をしつらえ、神様に奉納する米や昆布や煮干し、お神酒、それに施主名を記した幣束を供える。伝統ある儀式を重んじてこそ木造建築に魂が宿る——2代目・岩木勝志社長の信条だ。青森県産の木を使い、「大工の技」で建てた家を、家族が代々守りながら暮らしていく。地域にこだわる『いわ木の家』は、「継ぐ」家だ。



新築現場でこれから「上棟式」が始まる目印だ。建築を司る神様に感謝し、工事の安全と無事完成を祈願する儀式が上棟式。(有)岩木建設では、初代から受け継ぐ上棟式をどの現場でも行っている。祭壇をしつらえ、神様に奉納する米や昆布や煮干し、お神酒、それに施主名を記した幣束を供える。伝統ある儀式を重んじてこそ木造建築に魂が宿る——2代目・岩木勝志社長の信条だ。青森県産の木を使い、「大工の技」で建てた家を、家族が代々守りながら暮らしていく。地域にこだわる『いわ木の家』は、「継ぐ」家だ。

## 皆様に支えられて66年 『家業の工務店』を継ぐ

### 県産材で建てた展示場 長期優良『いわ木の家』

十和田市洞内の国道4号沿いに立つ『いわ木の家』の看板。長期優良住宅展示場『いわ木の家』(延べ60坪)への案内板だ。展示場が完成したのは2010年。全部「近くの山の木」で



十和田市の国道4号沿いに立つ長期優良住宅展示場『いわ木の家』の看板(右奥が展示場)

建てた「青森県産材の家」だ。岩木建設では「地産地消の家づくり」を発信して16年になるが、10年前からはこのモデルハウスを拠点に展開している。展示場が建つ以前は、600坪の敷地に作業場と、小さな平屋(9坪)があった。タタキに薪ストーブを置いた平屋は、事務



2010年にオープンしたモデルハウス「いわ木の家」。ヒバやスギ、アカマツなど使っている木材はすべて地元の木のこれぞ「青森県産材の家」のはしりだ



モデルハウスを拠点に“地産地消の家づくり”を展開

所兼大工の休憩所であった。建てたのは父親で初代の岩木政次郎さん。そのとき岩木勝志社長はまだ18歳。大工の修行に出て2年目だった。

「21歳で弟子上がりしました。が、あの頃は家を建てるといっても年に1棟くらいで、千葉や北海道へ出稼ぎに行ったり、父に付いて地元の建設会社の下請けをしたりしていました」

でも、いつまでも下請けでは自分のカラーが出せない。岩木社長は「今後」を模索していた。住宅展示場の建設に補助



展示場が建つ以前の小さな平屋建ての事務所

金が出る、という朗報がもたらされたのはそんなときだった。

青森県が長期優良住宅の展示場建設を募集したのが、2009年。地元の木を使い、長持ちして、断熱性が高く、二酸化炭素の排出量が少ない一般住宅を増やそう、という国の方針に沿って実施した事業（青森県地域住宅モデル普及推進事業）であった。岩木社長は、意を決して応募した。翌年、9坪の事務所が60坪の住宅展示場「いわ木の家」に生まれ変わった。

そこが、創業66年を振り返るポイントだ。

## 初代が建てた「木の家」 54年前の「建前」の写真

岩木専務が含み笑いをしながら、冊子をテーブルに置いた。アルバムだった。1枚の写真を指さす。これ見てください、と。大きな家だ。70坪くらいか。「建前」が行われるその日に現場で写したものだ。古い写真だが、カラーだ。昔の農家は大きかった。暮らす家族が多かったのだ。

屋根に垂木を渡しているところで、屋根板はまだ打っていない。屋根にのぼっている人はざっと20人はいる。その状態でのぼっているのだから、てっきり大工かと思ったら、岩木社長が笑いながら、「大工は5、6人だけで、あとは身内とか近所の人たちなんです。昔は建前はめめたいことだったからね、集まってきたて手伝ってくれたもんです」

大工以外は、つまりは一般人なのだが、それでも真下に地面

が見える高所をものともせずのぼったのは、昔は、家を建てることはその地域に暮らす人たちの「共同作業」でもあったから、皆張り切っていたのだろう。

専務がもう1枚の写真の指さした。家の前で、鉢巻きをして、ノコギリを手に、横を向いている男性が写っている。目を近づけると、顔が笑っていた。片足で押さえた角材を切ろうとしているところを、おそらくはカメラを構えた施主に声をかけられ、照れて脇を向いたのでないだろうか。

「初代なんですよ」と専務。岩木社長の父親の岩木政次郎さんだ。岩木社長が、「たぶん私が小学6年生のときですね」とすると54年前だ。「あの当時は、製材所から木材が現場に運ばれてくるんじゃない、製材の機械を積んだ移動車が現場まできて、そこで製材しながら建てたものなんです。外材もまだなく、それこそ使う木は全部地元

の木でした。石膏ボードなんていうものもなく、使うのは無垢の木と板だけ。文字通りの『木の家』でしたよ。木をたくさん使っていたから丈夫で長持ちなんです」

それを証明するように、築54年前になるこの家は十和田市深持に今も建っているそうだ。

昔の建前といえば「餅まき」が付きもの。屋根からまかれる餅や小銭を、子供と競うように大人も拾い合ったものだった。54年前のこの日も夕方に行われただろう餅まきの歓声が、写真から聞こえてきそうだ。

次のページのモノクロ写真には、ブロックが写っていた。岩木社長の自宅の隣にある小屋だそう。現在も残っている。

初代が自宅を建てたのは63年前。そのとき岩木勝志社長は3歳だった。その自宅を継いで、社長と専務が今も暮らしている。

後日、自宅を見学させていただくことにしたが、ちょうど七戸町に上棟したばかりの新築現場があるので、そこへ岩木社長がこれから案内してくれるという。

事務所を出て、すぐ左側に作



岩木社長の父親で初代の岩木政次郎さん（建前の現場の前で）



54年前の「建前」の現場写真。屋根にのぼっているうち大工は5、6人で、あとは手伝いきた身内や近所の人たち

業場がある。そこに何枚も立てかけられている分厚い板はヒバだという。そのそばには太い角材が積まれてある。8月1日（2020年）に上棟予定の次の現場に使うのだそう。

車に乗り込み、『いわ木の家』の看板から右折して国道4号を七戸へ向かった。その現場からは、走る新幹線のグリーンの中が見えるそう。車体が速く走り去ると、割りど



▶発見：右の写真は2020年8月に上棟した現場（七戸町）。54年前の現場写真と骨格がそっくりだ。建物にも親子の血が通う！

くりの2通りあって、ゆっくりが七戸十和田駅止まりなんですよ」と岩木社長が楽しそうに話す。

フロントガラスの前方に緩いアーチ状の橋が近付いてきた。新幹線の線路をまたぐ跨線橋だ。右手が新青森、左手が東京方面。列車はほぼ1時間ごとに往来するらしい。

車内に電話の呼び出し音が響いた。岩木社長がハンドルを握ったまま応じる。設計監理を担当しているお嬢さんの斐子あやこさんからだ。連絡事項に対して社長が指示をする。

### 防風林のスギを大梁に 家に生かされて支える

窓の外にスギ林の防風林が連なっている。横なぐりに吹き付ける風を防ぐために、昔は個人で家の脇に木を植えて防風林を設けたものだそう。

行き止まりの道の傍らに、現場が見えてきた。平屋で45坪。いかにも頑丈に見えるのは、柱



七戸町の平屋の新築現場。玄関の右側に出幅が1間半余りの「下屋」と、L字型に続いて建物の裏にも1間の「下屋」が設けられている

が多いだけでなく、1本1本がみな太いからだ。一般に使われている3寸5分(約10cm)角の柱に対し、『いわ木の家』は4寸(約12cm)角。その違いが遠目にも「頑丈さ」となって映るのだ。

「太い木をなにも細く削って使うことはないのです。太い木を多く使って建てれば、自ずと丈夫で長持ちする家になるんですよ」

岩木社長の持論だ。到着した現場は、ブログにアップされ



「あ、来た」と岩木社長が指さす先をグリーンの新幹線が通り過ぎる

ていた写真よりもずっと大きい。玄関の右側に張り出している屋根が、『いわ木の家』のシンボルの「下屋」だ。出幅が1間半余り(約3m)もある。奥行きも4間半(約8m)で、車を縦に入れば2台停められる余裕の広さだ。新幹線が走る側の裏手に回ると、そこにも1間(約1.82m)幅の「下屋」が。親思いの施主が、雨に濡れずに母親が野菜を洗えるように下屋の下

に洗い場を設けてほしい、と要望したのだそうだ。

「下屋」は雨や雪を外壁から離れた所に落とすべく、屋根の下に確保されるスペースが重宝。

「突然雨が降ってきてても洗濯物が濡れないので、安心だしね。

今までずいぶんと下屋のある家を建ててきたけど、雨を気にせずに干して出かけられるところが一番好評ですね。それと、夏場は陽射し除けになるので室内は涼しいし、冬場は角度の低い陽射しが入り込むから暖かいしね。外壁も直接雨が当たらないから傷まないしと、いいことづくめなんです。日本建築の知恵ですよ」と岩木社長。

玄関から中に入ると、待つてましたとばかりに現場主任の大王が社長に声をかける。ここはどうする、あそこは……といった「納め方」の指示を仰ぐのだ。なにしろ岩木社長は、26年前の40歳まで大工として現場に入っていた。以降は社長業に

専念して営業に力を入れていたが、やはり現場で指示する姿は社長というより「棟梁」だ。天井に架かっている太い梁の脇にあつた防風林のスギを伐採し、乾燥させて挽いたものだという。長いこと家を風や吹雪から守ってくれた木を新しい家に使ってほしい、とは施主の母親の強い要望であつたそうだ。梁背(＝梁の高さ)が45cm、幅が24cm。見るからに頑丈で頼もしい。これまで家を守ってきた木が、新しい家に生かされ、これからも守っていくのだ。

施主は郵便局員で、まだ配達業務の担当で走り回っていた頃に岩木建設の場所も展示場も見て知っていたそうだ。「木」が好きで、敷地に積まれた太い木材や、加工場から聞こえてくる電動カンナなどの音がいかにも工務店らしく、その雰囲気から前々から気に入っていた、と契約後に教えてくれたという。

「こういう繋がりが嬉しいです

ね。建てる時期がきたときに、前々から知っていた工務店に声をかける。同じ地域に暮らしているから生まれる「縁」ですよ。ね。いい家を建てていけば、「縁」でまた次の1軒に繋がる。父の考え方がそうでした」と岩木社長は頷く。

新築現場が、同じ七戸町で2軒同時に進んでいて、もう1軒もここから近くだそう。そこへも案内してくれるという。さつき渡ってきた跨線橋に近付いたときに、社長が、「あ、来た」と指さした。同時にグリーンの新幹線が右から左へ滑っていった。カメラを向けて間に合ったのだから、ゆっくりのほうの、七戸十和田駅止まりだったのだろう。

次の現場へ道なりに進んでいくと、道端に『いわ木の家』の看板が立っていた。

敷地を板で四角に囲っているのは「やり方」だ。これから基礎工事にかかる段階である。母屋が延べ62坪。下屋を含めると建

築面積は82坪にもなる。車庫が40坪。施主は林業会社の経営者で、岩木建設の展示場に一目惚れしたのだそう。

岩木社長が思い出すふうに、「リビングに立っている太いクリの柱が気に入ったんですよ。スギとかヒバとかケヤキとかいろいろな種類の木を使っているところもね。仕事が林業だけに木に惹かれたようです。この展示場と同じに造ってくれて言われましたよ」

展示場の見学がきっかけで建てたユーザーをこれまで何軒取材しただろうか。1、2、3……と数えてみる。20軒は超える。そのほとんどが「下屋のある家」だ。

## 工業大学卒業し修行中 大工の世界学ぶ3代目

ゆくゆく岩木建設の3代目を継ぐのは、長男の岩木克仁かつひとさん。26歳。現在、北海道の武部建設㈱（本社・岩見沢市、武部豊樹社長）で大工として働いて

いる。

室蘭工業大学を卒業し、勤めて2年目。そこで6年間修行し、30歳になったら岩木建設に帰ってくる約束だ。

「そのときには嫁を連れて帰ってくる気構えがなければ」と岩木社長が父親の顔になる。

工務店の長男として生まれた克仁さんは、将来は父親の跡を継ぐという意識が子供の頃からあったようだ。小学6年生のときのエピソードを専務がこう話す。

「卒業式の会場に、児童たちが記念として書いた習字が貼ら

れてあったんですよ。『切磋琢磨』とか『誠意』とかね。息子が書いたのは『いわ木の家』でした」

岩木社長が頷きながら、「建築の道を進むといつても、2つあるんです。設計と、大工の道です。息子は大工の道を選びました。昔なら中学を卒業して大工に弟子入りしたものです。私もそうでしたが、息子は大学に進みました。卒業したら、他で修行してこいと薦めました。社長の息子が入ってくるとなると、大工たちは、口では言わないにしても内心反感を抱くものなんです。どこの会社でも同



札幌市で開かれた「削るう会」の大会に参加してカシナがけの腕を磨く岩木克仁さん

じでしょう。修行してくれば、それなりに息子も自信がつくし、受け入れるほうも違ってきます。息子は自分で探して武部建設に入社しました」

専務が続ける。

「中小企業の経営者が集まる勉強会が長崎であって、そのときに講演をされたのが武部社長さんだったんです。繋がりがあるな、と思いましたね。武部社長さんは、家業の製材業を引き継いだんですけど、注文を受けて木材を納めるだけではこれから生き残れないと判断して、建築業の元請けへと舵を切ったんです」

岩木社長が継ぐ。

「製材業も下請けだから、仕事の量も代金もいつも元請けに左右されます。金額的にこれで、となれば、それで請けるほかはない。仕事がなければ来るのを待つしかない。営業に出て仕事を取るのが、道を拓くこと。私もそう決断して、元請けへと方向転換したのです」

そのときにちょうどタイミングよく、青森県が長期優良住宅の展示場建設を募集したのだった。運が向いてきた。

## “芯の入った木”で建てる

父は休まない人だった  
戒め「金儲けに走るな」

岩木勝志社長は1954年、十和田町に生まれた。現在は合併して十和田市に。自宅は大工たちが集まる環境で育ったことから、迷わず大工にと中学卒業後に地元の大工に弟子入りした。1年目の月給は7350円、2年目が1万円、3年目で1万5000円。その頃、東京では10万円もらえたという。

「でも、東京に行った大工たちは今はほとんど残っていません」と岩木社長。「それと、棟梁が呑んべえで朝起きてこないといった工務店も残っていません。その点、父は正しかった。とにかく休まない人だった。記憶に残っているのは、雨の日もカッ

パも着ないで働いている姿ばかりです。その父がこう言ったんです。「一人前になる前に金儲けをしようと思うな」と。金儲けに走るな、という教訓ですね」

ね」

当時、「岩木建築」の看板を掲げていたとはいえ、新築の現場は年に1棟くらいのもので、冬場は出稼ぎに出たりもした。父親が亡くなったのは1999年、70歳だった。その後、地元建設会社の下請けが主な仕事となっていたが、そのころを振り返って専務が話す。

「建設会社の現場監督に頭を下げるのは、違うだろ、って思いましたね。仕事をもらっているからへこへこするんですよ。それは大工の姿じゃない。大工って、もっと堂々としているもんです。義父、先代がそうだったも

の。家を建てていたときの姿は堂々としていたもの。昔の大工には誇りがあった。いつまでも下請けじゃだめだよ、って社長に言ったんですよ」

その言葉が、岩木社長の背中を強く後押ししたのだ。

青森県産材のヒバやスギ、アカマツなどを使い、大工の技で建てる家。柱は太く、板は厚く、惜しみなく木材を使い、丈夫で長持ちする家——それが岩木社長の“カラー”を打ち出した展示場『いわ木の家』であった。

オープンすると、展示場は評判を呼んだ。訪れた見学者から



弟子入りして2年、17歳のときの岩木社長





木の香が漂うモデルハウスのリビング。ワンフロアで続くキッチンでは野菜を中心とした「ベジタリアン料理教室」も開かれている



岩木建設の恒例のイベント「職人祭り」(2019年)

は、「木の香りがする」「無垢の床板の足触りがいい」など好意的な感想が寄せられた。展示場に「泊する「宿泊体験」も好評で、我が家も木の家で、と注文中に結び付いた。

岩木社長が次に手を打ったのは、新人大工の育成であった。墨付けや、ノミを使い手刻みができる基礎からの技術を習得した大工を育てようと、高卒で採用した新人を職業能力開発校(昔の訓練校)に通わせた。育てなければ、継承してきた技術が廃れてしまう。「木の入った木」を扱える大工でなければ「いわ

木の家」を建てられない。岩木社長が話す。

「昔の大工は職人気質だったから、気に入らなかつたりすると現場を放り出して帰ってしまったね。よくあつたもんですよ。腕前を自慢に渡り歩く者が多くて、工務店はどうしても請負仕事をする一匹狼たちの集団になりがちだった。請負で現場をこなすだけでは工務店としての将来は拓けない」

『いわ木の家』を支えるのは大工だ。大工を育成して継いでいかなければならない。それには建築大工の資格を持った常備じょうびよう

——日雇いに対し、常雇い——の社員大工を育てること。腕前より人間性を優先する。新卒採用して育てるのはそのためだ。給料も日給月給から固定月給制にして生活基盤の安定を。技術を身に付けた大工から若手へ「技」を継承していく。そういう組織でないと工務店の成長もない。

「入り込もうとしても、そう簡単には受け入れてくれない独特な職人の世界が「大工島」なんですよ」と専務。「島」には、よそ者を拒否するような雰囲気があるでしょう。大工の世界もそうなんです。大工の嫁として長年やってきたわたしの実感です。悪い意味じゃありませんよ。長男だからといって岩木建設に入っても、そうそう簡単に大工たちを使えるものではないということ。独特のプライドが大工にはあるんです。職人気質ですね。社長(岩木社長)はもと

もと大工で、だから指示も大工たちは素直に聞くけど、わたし

は専務でも大工じゃないから、「何が分かる」と口では言わなものの、顔に書いてあるんです。大学を出ただけで入つてきても、大工たちは3代目としては受け入れてくれませんよ。よそで修行して一人前の大工として帰つてこなくちゃね。でないと、岩木建設は継げません。受け継ぐ」ということは、会社だけじゃなく、この地域も、暮らす人たちの生活も、大工たちも、大工たちの家族も自分の家族も全部背負うということなんです。性根を据えてかからなければ続きません——専務として、母親としての厳しさがこもる。

展示場を建てて以来、岩木建設では「感謝祭」を行ってきた。「感謝祭」から「職人祭り」へと名称を変えて今も「木」や「職人」と触れ合えるイベントとして継続している。

『皆様に支えられ創業六十五年ありますがとうございます』(2019年)



④先代が建てた家を古民家風にリフォームした岩木社長の自宅。天井裏に隠れていたアカマツの太鼓梁を現わしにした室内には築63年の風格が漂っている⑤差鴨居の上部に並ぶ「鼻栓」は、部材を繋ぎ止める伝統の大工の技

会場に飾られる「横幕」の創業年数が、1年1年増えていくのだ。

## 狂いがない築63年の自宅 まるで新築の「古民家」

7月上旬の日曜日、岩木社長の自宅を訪ねた。十和田湖への入り口の焼山に近い十和田市法量。国道102号（十和田湖おいらせライン）から折れ、緩い坂道を上っていく。杉林に囲まれて建つ赤い寄棟屋根が

自宅だ。平屋で52坪。約束の午前10時にまだ間があるので、周辺を歩いてみることにした。

坂道の端に車を止め、ドアを開けると水音が高まった。山から流れ下りてくる絶えない恵みの水だ。

自宅の隣に建っている、ブロック壁の建物は小屋だ。事務所で見せてもらったモノクロの写真がこれだ。自宅と小屋が60年以上も、高台に並んで建ち続けているのだ。断層がずれたような



段差の高さは10mはあるだろう。もともと山だったところを、斜面を切り崩して均し、畑をつくり、家を建ててきたその歴史が刻まれた姿なのだろう、と眺めやる。

ブロック造りの小屋からやや離れたところに、大きな看板が設置されていた。お馴染みの『いわ木の家』。横幅が自宅の間口ほどもあり、市街の方向へ堂々と胸を張っている。

岩木社長が、困いに手をつきながら眺めていたのは生簀であった。水音をたてて流れ下りる山の水は、昔は生活用水として使っていたが、今はヤマメとイワナを養殖する生簀に流し込んでいるという。年に1度、漁業組合が売り出す稚魚を買ってくるらしい。群れ泳ぐ10cmほどのヤマメたちは、1年もすれば櫛を刺して塩焼きにできるくらいに大きく成長するという。隣近所にもお裾分けするそうだ。

敷地内にある作業場に最近、

岩木社長が巣箱を作ったそうだ。ヒバ製の巣箱が作業場の天井に2つ並んでいる写真を、専務がフェイスブックで紹介していた。

「ツバメが飛んできているんですよ。電線に4羽止まっていたので巣を作ってみたんだけどね、まだ入らないんですよ」と岩木社長が笑う。自然が好きで、野鳥などにエサを与えているそうだ。

玄関ドアが開いて、専務が迎え入れてくれた。玄関ホールから居間に続く床板が光っている。照明の明かりを照り返すほどに無垢の板が磨き込まれているのだ。どつしりと立つ太い柱はクリで6寸(約18cm)角。梁と鴨居が一体になった差鴨居はアカマツで、背(高さ)が1尺(約30cm)もある。

鴨居までの高さは昔の寸法だから5尺8寸(約175.7cm)。天井が低いのでリフォームの際に取り払ったという。現れたのが見事な太鼓梁。その上に

交差する太鼓梁もアカマツだ。天井裏に隠れていた、大工の技を現わしにして生かすことにした。黒光りする木肌の趣きがいにしへの懐を抱かれたような落ち着きを醸し出した。

先代の岩木政次郎さんが建てたこの家には、かつては馬を飼っていた厩もあれば、ワラを積んでおくマゲもあったという。リフォームして厩は洋室に、階段を上がったマゲは屋根裏の子供部屋に変わったものの、柱や梁の構造材には寸分の狂いもなく、これが築63年とは驚く。古材を使って建てたような、まるで「新築の古民家」だ。「この戸は建てた当時のままなんです」

岩木社長が2枚の板戸を手で指す。細い棧が等間隔に平行に並んだ「舞良戸」と、中央に横に1本帯が入った「帯戸」。建てた当時のままの状態で、同じ所に建っているという。

開けた隣は和室だ。仏壇の上部に飾られた遺影は——先代



高台に並び建つ自宅とブロック造りの小屋。その右隣には『いわ木の家』の大きな看板が胸を張る



自宅の敷地内にあるヤマメとイワナを養殖する生簀

の岩木政次郎さん。微笑みでいる。専務がしみじみと、「リフォームしたときに天井をはが



五色の旗と矢車が立つ七戸町の新築現場でこれから上棟式が執り行われる



大工の「安全だいいち〜」の掛け声とともにまかれる小銭と五穀を歓声をあげながら拾い集める昔懐かしい光景

したら、太鼓梁が現れたんです

よ。それ見て、これだと思ってしまいましたね。これが家だよな、これが大工の技だよなって、ね。こういう家を建てていこうって。これが先代から受け継ぐべき家だよなって」

「鼻栓」も大工の技の一つだ。貫はなせん通したホゾなどの先端に打ち込むクサビ状の細木が、鼻栓。部材を繋ぎ止める伝統の技術は、古民家の室内の「装飾」にもなる。

岩木社長が、リビングの内壁の板を指した。木の話になると

笑顔になる。

「1枚が1尺幅で、全部で9種類張ってあるんです。息子が大工になったときに、木の種類を覚えられるようにと思ってね」

樹種は右端からスギ、セン、ヒバ、アカマツ、ケヤキ、カツラ、サクラ、クルミ、クリ。

地元の木を何種類も組み合わせさせて使うところが『いわ木の家』の特徴だ。

展示場もそうで、12種類の木を使って建てた。柱はスギやクリ、リビングの床はカラマツ、和室の床はカバザクラ、洗面室はヒバ……。地元の小学生たちが

体験学習で展示場を訪れた際に、岩木社長はこう述べた。

「木にはそれぞれ特徴があります。堅い、柔らかい、木肌がきれい、とかね。それぞれが特徴を主張するんじゃない、協調し合う。空間に溶け合う、ということですね。堅いヒバは土台に、

柔らかく足触りが良いスギは床に、曲げに強いアカマツは梁に、といった具合にね。人も同じです。皆それぞれ個性が違います。それを主張ばかりしている

のではまとまりません。個性の違う木を使って1軒の家を建てるということは、それぞれの個性を生かして一つにまとめることと同じなのです」

聞いた子供たちの中から大工が育つかも知らない——そういう思いで岩木社長は語りかけるのだ。

### 五穀と小銭まきに歓声 祝い酒ふるまう「直会」

8月1日。上棟吉日。ひと月前に岩木社長が案内してくれ

た七戸町の新築現場で、夕方から上棟式が行われる。

フロントガラスの前方に、旗が見えた。屋根の上に立つ五色旗だ。その隣に矢車。背後の防風林の緑に映えている。

現場を間近にして、目を見張る思いがした。そっくりであった——あの、岩木建設の事務所

で拝見した、54年前の写真の現場と。一部2階建てで大きさもほぼ同じ。先代の岩木政次郎さんが、「建前の現場の前で角材に片足を乗せ、ノコギリを右手に、照れたようにしていた横顔も蘇る。

後ろ手を組んで眺めている男性が施主だった。林業を営むと岩木社長から聞いていた。今では貴重品となったヒバ材を施主が提供し、それを大黒柱と、4寸角の柱に挽いて立てた。梁

背45cm、幅24cmの太い大梁は、130年物のスギを伐採したものだという。

「8寸角の大黒柱を8本立てたのは、八は末広がり縁起が



大工への感謝と無事完成を願う施主のはからいで現場に設けられた「直会」の席

いいからです。樹種はヒバが4本、ケヤキが1本、スギが1本、ナシが2本。このほかにエンジュと、クワの木を使ったのは「槐・桑・梨」といつて、「長寿で災い無く(梨)安泰に暮らせる」ようにと願いを込めるためです」と岩

木社長。ゲンを担ぐところもまた伝統である。

午後3時。棟梁の掛け声で、大工たちが下に降り始める。上棟式の準備だ。コンパネを敷いてしつらえた祭壇に、紅白の一升丸餅、昆布、煮干し、季節の野菜、この家に住む人の歳と柱の数を合わせた分の五百円玉や百円玉や十円、五円の小銭を五穀に混ぜて供える。

ロソクに点けた火が穏やかだ。すぐに吹き消される荒れた日もあるから、風がないだけいい家が建ちそうな気持ちになる。祭壇に向かい、岩木社長、現場の棟梁、施主、家族と順に、塩をまき、米をまき、二礼二拍手一礼。続いて大工たちや社員が施主に名刺を差し出し挨拶をする。「挨拶」を基本に掲げている、岩木建設の躰だ。

「安全だいいち」

2階に上がった若手大工3人が、掛け声とともに小銭と五穀を空中にばらまく。歓声をあげながら拾い合う昔懐かしい

光景が展開された。開いた傘をさかさまに持つて効率的にキヤッチする頭脳派の母子。透明のビニール傘にみるみる小銭が溜まった。大工たちが頭に巻いているのは、この日のために施主が用意した「祝上棟」の特製の白や黄色いタオル。施主が込めたその思いの分、建前は盛り上がった。

紅白の一升丸餅を供える上棟式も珍しいが、その後、現場に席を設けて施主が大工たちに祝い酒を振る舞う「直会」が行れたのも滅多にない。帰りの運転は専務に任せ、岩木社長は施主に勧められるままコップを口に運んでいた。

七戸町の町長が出稼ぎ対策で林業の会社を興した。それを施主が継いだ。林業が地域の山を守る。山で育った木で岩木建設が家を建てる。家業としての工務店を受け継ぐことが、地域に暮らす人々の生活を守る。『いわ木の家』は、「地域」を継いでいく。

いわ木の家

## 有限会社 岩木建設

十和田市大字洞内字井戸頭175-1  
TEL.0176-27-2906 FAX.0176-27-3259  
E-mail:iwaki@sea.plala.or.jp

